

小屋の飼い葉桶に注がれています。人の目がアウグストウスに注がれ、その業績が多くのものに描かれているのに、人の目とは全く正反對の、世界の片隅に向けられているのです。そこでは、人の視線と福音書の視線、つまり神のまなざしが全く交差しているのです。これが、クリスマスをはつきりと他と区別することになります。

そこには、富ではなく貧しさが、華やかな生き方ではなく素朴な生き方が、人の持つ力ではなく弱さが、大勢ではなく三人の家族に、保証されたことではなく居場所のない頼りなさの中にあります。

しかし、争いではなく穏やかさがあります。それは神の言葉を受け入れた穏やかさです。ヨセフもマリヤも心配事がなかったのではありませぬ。ヨセフは悩み、マリヤは心に納めて、思い巡らします。しかし、疑いではなく信頼が、支配ではなく仕えることが、不安ではなく希望が包んでいっているのです。

それは「御言葉の通りであった」ことが重要です。馬小屋での出産という厳しい現実には耐えられるのは、それが御言葉によつて示されていたからです。むしろ、神の言葉の通りであったことは喜びと信頼と希望をもたらしたのである。クリスマスは御言葉の実現によることです。ヨハネによる福音書には「言は肉となつて、わたしたちの間に宿られた」(一・一四)とあります。そして「言は神であつた」(二・一)と言います。つまり言葉によつて神御自身がそこにおられるのです。言葉の受肉です。

人の栄光はアウグストウスが体現してしました。知恵と手腕、強力な軍隊と技術が栄光をもたらしました。しかし神の栄光は言葉によるのです。

神は語りかけてくださいます。主イエスが

山上で人々に語りかけてくださったように語りかけてくださるのです。飼い葉桶の幼子もその存在によつて語りかけているのです。御言葉はそれを聞き受け入れたものには現実となるのです。マリヤとヨセフにとつて主の言葉は弱い幼子として、しかし確かに命に息づくものとしてそこに現れているのです。マリヤにとつては陣痛を乗り越えた子の誕生であり、ヨセフには自分で抱き上げた子どもでした。何一つ充分なもののないところでした。

しかしそこにはローマ全体よりも栄光がありました。アウグストウスの栄光もローマの栄光もとつくに過ぎ去りました。しかし、この幼子の栄光は、わたしたちの今この時と場所にまで失われることはなかったのです。

飼い葉桶の幼子は、誰も予想することのできなかった救い主の姿です。クリスマスを知っているはずのわたしたちにとつても、このように神の言葉が肉体となつて現実となつたことはいつとも新しい驚きです。

神がこのような仕方を採られたのは御心によることでした。真の神にして真の人である救い主は、人の生きる現実を負われました。人が生きること、染みついている罪、死によつて神の祝福を失い、むなしなものとなつていくことから救われるためです。

飼い葉桶は棺、布は葬りのしるしとされてきました。十字架の死と葬りのしるしです。クリスマスがもたらした罪からの救いの仕方は、人の生きた現実をこの幼子が引き受けていることから始まったのです。

聖書はこうして、わたしたちの目を飼い葉桶の主に向けさせてくれます。この礼拝も飼い葉桶の主を見つめるものです。

それは教会がよつて立つ事実です。わたしたちは今でもこの事実を御言葉による礼拝によつて確かめます。神の言葉の確かさをマリ

アやヨセフと同じように受け止めることができるのです。(二月一九日公同礼拝)

## 講壇点滴

### 大きな喜び

ルカによる福音書二章八〜二一節

牧師 姜 涇 米

神様の独り子であられる救い主イエス・キリストが、私たちと同じ人間として、母マリヤの出産によつてこの世にお生まれになったことをルカによる福音書二章は語っています。それはユダヤのベツレヘムにおいてであり、生まれた主イエスは布にくるまれ、飼い葉桶の中に寝かされたということが七節までに語られています。八節以下は、この出来事が、神様によつて最初に羊飼いたちに伝えられたことを語っています。

彼らは野宿しながら羊の群れの番をして、自分たちの仕事に励んでいました。そのようなこの世の働きの中にある人々を神様は選んで、救い主の誕生をお告げになったのです。私たちはこの羊飼いたちを特別な人々ではなくて、自分と同じような人々として理解することが大事だと思ふのです。

羊飼いたちに天使は、「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる」と語りかけました。恐れを感じている羊飼いたちに、大きな喜びが告げられるのです。神様に選ばれ、語りかけられる時に私たちに起るのほこういうことです。驚き、戸惑い、迷惑に感じる私たちに、神様は、大きな喜びをお告げになるのです。その喜びは、「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお